

1. 研究主題

郷土の歴史 羽咋を中心とした能登地方の歴史の教材化とそれを活用した授業づくり

2. 主題設定の理由

現在の定時制・通信制高等学校は、勤労青少年の教育機会を保障する役割をはるかに越えて、多様な生徒たちが入学し学んでいる。「生徒の意欲を高める授業」が教師間の共通認識になっている。学校設定科目「郷土と歴史」実践では、地域の方と連携し体験学習を中心とした学習をし、「楽しい授業だった」という感想が多かった。さらに、『石川の学校教育振興ビジョン』のなかに「ふるさとに誇りを持ち、広い視野にたつて社会に貢献する人間」を掲げている。

これらのことから、本校生徒の現状を踏まえ、これからの教育に必要な力をつけるため、地理歴史科の中で地域を位置づけ、学習することが必要であると考え、本研究主題を設定した。

3. 研究の目的

郷土の歴史を「日本史A」の授業で扱い、個々の生徒の学習状況に着目し、指導と評価の一体化を念頭においた「生徒の意欲を高める」授業実践をする。

4. 授業実践

(1) 内発的動機づけを高める授業について

知的好奇心を促す 「それ、ほんと？」と言わせるような情報提供をする。

有能への欲求を満足させる 自分は仲間や先生に対し役に立ったと実感させる。

「関心・意欲・態度」を高める評価をする。 絶対評価の趣旨を十分活かす。

(2) 単元：「産業革命の進展と地域の繊維産業の変遷」地域学習 5時（「歴史と生活」に位置づける）

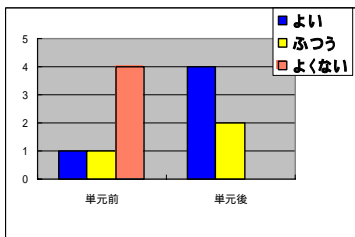
地域素材： 繊維産業と羽松高校

意欲を高める手だて：未知の情報提供（多くの卒業生が地元繊維会社に就業していたこと。彼女たちの多くが北海道や東北、九州の出身者）、視聴覚教材の利用、形成的評価の活用、ゲストティチャー、グループでの調べ学習。

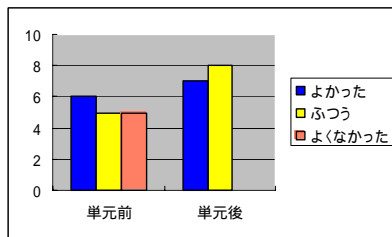
(3) 評価方法と視点：授業改善のための評価ととらえ、多様な評価方法をとる。自己評価やT2みとり評価、ウェビング法。

Tの観察法や作品法（ワークシート） 重点化、焦点化する。

抽出生徒の日本史の評価



地域への関心の変化



授業実践の総括

A. クラス全体

・日本史（単元）評価では、「よくない」生徒がいなくなる。

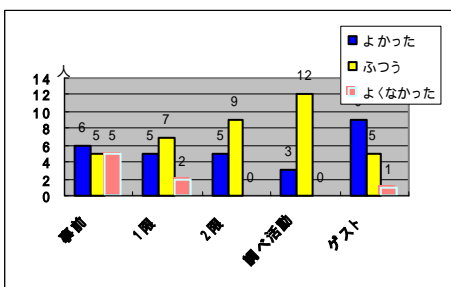
地域への関心は高くなった。無関心の数は変わらなかった。

単元の中で、ゲストティチャーの自己評価が1番高く、調べ活動が1番低い。

5. 結論

意欲を高めるためには、地域素材を教材化する際、疑問や興味を持たせる工夫が大切である。地域学習で可能な手だて（身近な所での未知の情報、ゲストティチャーなど）を有効に活用したことが本実践のポイントとなる。

個に応じた形成的評価が、意欲を高めることに有効である。（観察、作品法その他、ワークシート提出時の生徒の一言コメントは時間もかからず効果があった。）



課題 地域学習のための十分な時間の確保

資料活用技能の育成

関心・意欲・態度と知識・理解の関係